投稿　論　　文

美容外科をめぐる理論と表象
――アイラ・レヴィン『ステップフォードの妻たち』を例に――

英 美由紀

要　旨

現在の思潮において、身体はジェンダー、民族、階層等の権力構造を反映する社会的・文化的な構築物として、議論の対象となっている。女性のダイエットや摂食障害、ファッションや化粧等、身体の外見に向ける関心を、ジェンダーの観点から分析する研究もその例と言えるが、本論ではきわめて現代的な領域として美容外科を取り上げている。

美容外科が「女性的なものとジェンダー化されている」現在の状況を踏まえ、本論ではまず20世紀前半のアメリカを中心とした形成外科の成立と、美容外科の発展期以来、女性の容姿が医療対象となる文化言説が形成されてきた医文化史的背景をたどる。（その過程で、機能的には問題のない身体を治療の対象とする「容姿の病理化」や、医師―患者間の力関係をジェンダー間のそれと重ね合わせることによる「女性の医療対象化」の文化言説が形成された。）続いて身体、特に美容外科をジェンダーの観点から考察したこれまでの理論を概観し、複数の相対立する立場を、代表的な論者とともに紹介したうえで、女性の美や美容外科を主題に据えた表象作品に視点を移す。ここでは上述の理論的な対立において、その登場人物の扱いが争点となった経緯をもつ一編のアメリカ小説『ステップフォードの妻たち』、及び後に翻案・映画化された2作品も検討の対象としながら、新たな解釈の可能性を提示する。

キーワード：身体、美容外科、アメリカ文学、アイラ・レヴィン、『ステップフォードの妻たち』

フェミニスト倫理学に関するアメリカのある学会で、美容外科をテーマとするパネル・ディスカッションが行われた際、発表者のキャスリン・ポーリー・モーガン（Kathryn Pauly Morgan）がある小説の名を引き合いに出したことで、キャシー・デイヴィス（Kathy Davis）との間に議論が戦わされることになった。問題となったのは、アイラ・レヴィン（Ira Levin）の『ステップフォードの妻たち』（*The Stepford Wives*, 1972）で、夫たちから成る組織により、男性にとっての理想の妻たるべくロボット化させられる都市郊外の一群の主婦を描いた作品である。ステップフォードという架空の地名がその後、社会の要請する女性性を忠実に、言葉を変えれば盲目的に（再）生産するという意味の形容詞として英語に定着したほど強い影響を残した作品としても知られている[1)]。学会でモーガンが主張したのは、美容外科手術を度重ねる、整形依存とも呼ばれる患者たちは、この女らしさの規範に従順な、「ステップフォード」風の女性に他ならないというものであった。それに対しデイヴィスは、そうした患者たちも決して社会から一方的に鋳造されたロボットではなく、この小説の登場人物になぞらえられること自体が適当ではないと反論した［Davis　1995:175-177］。ここに見られる見解の対立は、美容外科とその患者たちをどのような理論枠組みの中で捉えるか、についての相違を端的に示すエピソードと言える。

近年の身体への関心の高まりは、社会の様々な事象

ともあいまって、いっそうの理論的精錬をもたらしている。身体の外見にまつわる研究はその一領域であり、ファッションや化粧、ダイエットや摂食障害等に加え、最も現代的なトピックとして、美容外科も議論の対象に挙げられるようになった。これらの問題については、ジェンダーを分析の軸とする研究が一つの有効な視点を提供しており、それは美容外科に関しても例外ではない。一方で身体をめぐる問題は、文学や映像等の表象分野でも主題として取り上げられている。本論では美容外科を社会におけるジェンダー関係との関連から問題化し、まず現在の美容外科の興隆に至るまでの医文化史をたどり直す。形成・美容外科はアメリカで最も早く医学の一分野として確立したが、そこでは機能的には問題のない身体を治療の対象とする「容姿の病理化」や、医師―患者間の力関係をジェンダー間のそれと重ね合わせることによる「女性の医療対象化」の科学言説が形成されたことが明らかなためである。続いて美容外科をめぐる理論の形成と近年の動向に目を移すが、これを論じる理論的な見地や方法論は一様ではなく、現在までに複数の議論の枠組みが提出されている。上に挙げたのは各々の立場を代表する理論家と言って差し支えないが、ここでは彼らの主張を中心に、その理論的変遷を概観する。最後に、彼らが自説を展開する際に例に挙げた小説『ステップフォードの妻たち』を取り上げる。この作品は数度にわたり翻案・映像化もされてきたが、その過程は理論面の変化と呼応しているためである。本論では2本の映画作品もあわせて考察の対象とすることで、現在に至るまでの女性の身体をめぐる議論の変化をたどることとする。

1. 医文化史的背景

1.1. 形成外科の成立と発展

医学における形成外科の歴史を遡ると、紀元前のエジプトやインドに行き着くとされるが［Davis 1995:14, 山下　1991:93］、それがルネサンス期にはヨーロッパに伝えられた。美容外科が独立した医療の一分野として確立したのは20世紀に入ってからのことであり、それまでは先天性の疾患や、ライ病、梅毒など身体上の欠損をともなう疾病の治療、また20世紀も当初は戦争負傷兵の治療の手段としての再建手術（reconstructive surgery）が中心であった。ここで培われた外科的な技術が、大戦間期頃から特にアメリカにおいて、美容を目的とする手術に応用されるようになったわけである。とは言え、再建外科と美容外科との境界は実際には長い間曖昧で[2)]、1920-30年代に形成外科の組織化や医師の管理制度などが徐々に整えられた後も、形成外科としていずれを本分とするかについては、理念と実状との間の乖離が解消されることはなかった。つまりここで問題となったのは、医学的見地からは機能的に問題のない生体を、治療の対象とし得るか、という倫理上の問いである。あくまでも再建治療を形成外科の本来的な意義として堅持しようという意見と、需要が見込まれる現状を追認するかたちで美容外科を認可しようという意見とに別れ、形成外科関係の諸団体や、個々の医師の間に立場の相違が生じることになった。また利益の問題なども絡み、一人の医師の内にさえ、矛盾や二重規範が見られることも珍しくなかった。

しかし20世紀も後半に入ると、美容外科は社会的な承認を獲得し、一般に広まり始めた。特に1980年代以降は「美容整形時代」［Wolf　1991:220］とも呼ばれるほど大衆化した現象となり、現在に至っている。アメリカでは1980年代初頭から90年代後半にかけて、年間手術件数は約2.5倍、施術箇所は延べ190万箇所にも達し、これはアメリカ国民150人につき一箇所の施術が行われた計算になるという［Gilman　1999:3-6］[3)]。医療技術のさらなる向上により、今や「美容外科手術を免れる身体部位は理論的には存在しない」［Morgan 2003:168］とも言われるほどである[4)]。美容外科（手術）を指す名称として現在最も一般的に用いられているのは、英語では“cosmetic/plastic surgery”［Gilman 1999:12］、日本語では医学における正式名称は「美容外科」だが、「（美容）整形」の方が広く流通している［山下　1991:40］。現在のような美容外科の隆盛がもたらされた要因としては、医療技術の向上に加え、医療を消費と捉えるようになったことによる市場の拡大、美容業界の発展やメディアの影響などが挙げられる。さらに次項で見るように、美容外科手術の対象範囲を拡大したり、そこに社会におけるジェンダー関係を投影し、特に女性を医療対象として本質化する科学言説が助長した側面も指摘される。

1.2. 美容外科をめぐる言説の形成――「容姿の病理化」と「女性の医療対象化」

形成外科の成立期に、医療行為の目的を疾病等の治療に限定するか、美の追求まで含めるかが問題となったのは上述の通りである。最終的にその治療対象が拡大されるに至ったのには、メディアの発達による大規模な視覚情報の流通や、人の外見の重視、美容業界の発展等と並び、科学の諸概念の援用が強く作用したことが、エリザベス・ハイケン（Elizabeth Haiken）に指摘されている。それは適者生存というダーウィン主義の容姿へのすり替えであったり、対人関係における「第一印象」の重要性の強調であったりしたが、とりわけアルフレッド・アドラー（Alfred Adler）による「劣等感」という考え方の波及効果には目ざましいものがあったとされる［Haiken　1997:101-102, 105-106, 111-123］。形成外科の治療が心理面にもたらす効果については、既に戦争負傷兵への施術にも認められていた。さらに自分が人より劣っているのではないかという不安を内面的な不健康と結びつける劣等感の概念は、精神の健康を損ねる外見が治療の対象に値するという美容外科の正当性の主張に接続することが容易であり、美容外科を積極的に容認したい医師たちにはまたとない「科学的」な根拠を与えることになった。劣等感の概念はその性質上、手術の必要性の判断を患者の主観に委ねることとなり、医師側は機能的には正常な状態にある身体部位を「欠陥」とみなす判断から免れることができたわけである。劣等感という精神面での不健康を引き起こす外見の修正としての美容外科手術、という定式が一旦確立するや、あらゆる外見上の特徴や自然な老化さえ「病理」と化し、その範囲は一気に拡大する結果となった[5)]。こうした動向がもたらした弊害としては、病理というレッテルが逸脱の領域を押し広げたことの他に、病理の社会的原因が消失させられたこと、つまり医学言説により紛うことのない病理と糊塗されることで、その「病理」がむしろ社会的な原因に根ざしたものであることが隠蔽されたことが挙げられている［Riessman　2003:49］。

「容姿の病理化」を通じ美容外科が治療対象の拡大をはかるにあたっては、社会のジェンダー関係も巧妙に組み込まれた。そもそも美とはかつて男女ともが等しく関与していたものが、18世紀後半に社会権力において性が非対称になったことにともない、その実現が主として女性側に求められるようになった背景を持つ［Davis　1995:40］。そして美の追求と女性の関連づけが、現代に至るまでに半ば本質的なものとして神話化されてきたことは、ナオミ・ウルフ（Naomi Wolf）の『美の神話』（*The Beauty Myth*）にも明らかにされたところである。ジェンダー間の権力の変動による美の捉え方の変化は、女性に各種の美容実践や身体加工も課すことになり［Davis　1995:40, Freedman 1986:61-62］、その傾向が現在の美容外科をめぐる状況にまで続いている。

特定のジェンダーの医療対象化を、「文化的企て」として論じたキャサリン・コーラー・リースマン（Catherine Kohler Riessman）によれば、医療に内在する政治的側面が顕著になるのは、社会において構造的に依存的な集団が、全体に占める実際の割合を上回る比率で医学的ラベルづけをされる時であるという［Riessman　2003:49］。美容外科手術に関する統計調査によれば、患者の性比率には歴然とした差が存在し、1990年代後半のアメリカでは全患者数のほぼ9割が女性で占められている［Gilman　1999:35］[6)]。つまり性比率において著しいアンバランスを示すこのようなデータには、紛れもなく美容外科という「疾病や治療に埋めこまれた性の政治」［Riessman　2003:47］を指摘することが可能なのである。医学言説が歴史的にジェンダー関係の（再）生産の目的で利用されてきたことは、19-20世紀のイギリスにおける女性と狂気の関連を論じたエレイン・ショーウォールター（Elaine Showalter）の研究に代表的に見ることができる。本来医療の領域で語られる必要のない、自然な老化にともなう容姿の変化さえ治療対象としての「症状」となる、「容姿の病理化」や「女性の医療対象化」も、女性と狂気の関連づけと同様、特定のイデオロギーに根ざした言説と言って良いだろう。つまりそれが自由と社会参加の行き過ぎを引き起こす女性を、社会管理により弱体化させる目的をもつ、という点においてである［Wolf 1991:220-221］。

女性の身体を病理化するこのような医学システムはまた、医学の領域から女性を締め出す傾向によっても助長された。一時は医療全般において女医が増加したことにより改善されていたのが、美容外科で再強化されることになったためである［Wolf　1991:221］。男性の治療者に対し患者の大半が女性という、かつての精神医学に典型的に見られたこの構図は、社会のジェンダー関係の反映であるとともに［Riessman

2003:58]、特に美容外科の文脈においては、男性医師をあたかも美を創造する芸術家や彫刻家、女性患者をその被造物になぞらえる、ピグマリオン神話の投影でもあった[7)]。「20世紀は女性の皮膚という、より抑圧的なコルセットを生み出した」[Davis 1995:41]と言われるが、それはこのように医学言説が客観的事実という権力を付与することで「容姿の病理化」を促進し、美容外科手術の必然性を主張するとともに、医療行為者としての男性と患者としての女性という、ジェンダーを介した権力関係性を反映した「女性の医療対象化」の言説が形成されていったことにもよる。

2.美容外科をめぐる理論の形成

ジェンダーを分析の主軸として身体、特にその外見への関心を議論する際に採られる理論的枠組みは、概ね3つに分類される。第一は第二派フェミニズムの流れの中で、女性の美の追求を個々の心理の領域から切り離して構造的な体系に位置づけるべく、美を要請し、女性の身体に抑圧的な状況をもたらす権力の所在を家父長制に求めたものである。ここでは女性の美の追求に批判的な立場が取られ、むしろ自らのありのままの身体を受け入れることで、女性の身体支配からの解放がもたらされるものと期待された。しかしこの見方はやがて、ミシェル・フーコー(Michel Foucault)の権力概念を基盤とする枠組みに取って代わられることになる。

フーコーは身体に最も直接的な関心を向けた理論家の一人であり、それを社会における権力の規範化のプロセスを通じて構築されるものと捉えた。フーコー自身は、こうした身体構築のパラダイムにジェンダーの視点をもちこむことはなかったが、フェミニズムは女性の身体を様々な文化言説、とりわけジェンダーをめぐる社会の権力関係の記述されたテクストとして、議論の俎上に載せた。フーコーはまた、身体の構築において従来の上意下達式の抑圧的な性質とは異なる、日常の言説実践を通じて作用する新たな権力の概念を提示した。これにより、各種の美容実践は規範的身体を(再)生産する権力作用と意味づけられ、女性はそうした規範の永続化に自らも関与する、共謀的な存在と暴露されることにもなった。つまり社会の権力構造に組み込まれ、その外側に立つことのできない女性たちの、いかなる行為も支配的文化言説に収束するものとして、その主体的選択や行為の可能性に懐疑的な姿勢が示されたわけである。そこで規範への能動的な関与の可能性を探求したのが、第三の枠組みである。

ここでは力というものの肯定的な側面を組み入れ、構造の内部に位置する個人とその身体を、言説行為の反復とそのずれを通じ、共謀と同時に抵抗・反逆も可能な場として提示した。その結果、社会構造も再生産されるだけではなく、掘り崩され、変質するものとして、再概念化されることになった。同様に、従来のジェンダー秩序も交渉され得るものとなり、社会変革を想像する余地が生まれたわけだが、非対称な権力関係における選択の自由の度合いに関しては、合意がなされていない面も残る。

本論冒頭に挙げたモーガンとデイヴィスは、上の第二、及び第三の理論的枠組みにおいて、特に美容外科についての議論を展開した代表的な理論家である。モーガンはフーコーの権力モデルを理論的な足場としながら、女性の美容外科手術を権力実践の一形態とみなした。そして患者たちの語る達成や解放、権力へのアクセス等の言語には魅力があるとしながら、一見女性の主体的選択と思われるような状況も、実質的には選択の余地のない「強制的任意性」[Morgan 2003:74]と呼ぶべきものであり、最終的には支配者のための変身に帰す「規範への順応」[Morgan 2003:72]に他ならないと主張した。

一方、美容外科患者を従属状態の再生産に与する者と位置づけるモーガンのような見方を、「文化中毒的な患者へのアプローチ」[Davis 1995:56-57]とし、その研究の方法や前提とする概念を批判したのが、デイヴィスである。モーガンがメディアを主な情報源としたテクストの分析に終始し、患者に直接対面した形跡が見られないことに加え、能動的な交渉の過程を入れないその権力の捉え方に、異議を表明したのである。デイヴィスは、手術を受けた女性たちを社会の犠牲者の位置に追いやるのではなく、あくまでも「自身のピグマリオンに」なろうとした者として擁護する[Davis 1997:175]。デイヴィスはまた、1980年代後半から幾度となく手術を繰り返し、施術のプロセスとその結果得られた自身の身体をアートとして提示する、フランスのオルラン(Orlan)のパフォーマンスを、「被創造物ではなく、自己決定する創造物として」[Davis 1997:175]の行為と解釈し、美容外科手術を

ジェンダー規範の転覆につなげる可能性として模索している。

両者の対立は、各々の拠って立つ理論や方法論の相違に起因すると考えられる。モーガンが議論の理論的土台とする、フーコーの権力モデルに基づいた身体構築のあり方は、文化的な美のシステムとそれへの女性の関与を構造的パターンとして捉え、その問題点を糾弾することを可能にするという利点をもつ。一方のデイヴィスは、女性の身体をジェンダー化された社会秩序の文化的・構造的抑圧の中に位置づけ、美容外科手術を「西欧の美の文化における最も有害な表現のひとつ」として、女性患者たちへの批判を許容しながらも［Davis　1995:5］、医療現場でのフィールドワークや面接調査を通じ、彼らの手術の決断を肯定的に受けとめるよう努めるものである。デイヴィス自身も要約するように、「女性の身体を通じて行われたものとしての支配の体系的特質に焦点を当てる」ことと、「女性が身体を通じて関わる多様な方法を明らかにする」ことの間には、フェミニズム理論間の緊張関係が存在しており、今後はそれが緩和されていく必要があると考えられる［Davis　1997:15］。

3.『ステップフォードの妻たち』に見る美容外科表象の変化

前項に見たような理論的精錬の一方、身体をめぐる問題は、文学・視覚的表象を通じても意欲的に提起されている。それはこれらの領域がファンタジーの形式や様々な視覚効果を採用することにより、身体やその変化を自在に描くことが可能であり、時には現代の医療水準にさえとらわれずに、時代に先駆けた問題設定を行えることとも関係していよう。

文学作品を例にとれば、一般に男性を主人公たらしめるのが人間性や強い個性であるのに対し、女性の場合はむしろ美というように、主人公はジェンダーにより求められるものが異なるとされる。しかし英文学に関して言うなら、19世紀のシャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë）以降の女性作家の中に、美貌ではない女性をヒロインに据え、その生き生きとした真の美を見出す能力がヒーローにあるかを問うストーリーの系譜が存在する［Wolf　1991:59-61］。一方、ヒロインの容姿を社会的な理想から逸脱するものとしたうえで、それに外科的な手段による改善を施すという筋立ては、当然現代に入ってからのものであり、先に概観した美容外科の一般への広まりとも足並みをそろえるかたちで、主に20世紀後半に見られるようになった。美容外科の対象として描かれるのがあまねく女性であるのに対し、医師が男性であるのも、現実の傾向を反映している[8]。以下に取り上げるレヴィンの『ステップフォードの妻たち』もその一例だが、この作品がその後二度にわたって映画化される過程には、前項に見たような美容外科をめぐる理論枠組みの変化をたどることができる。

若い妻の妊娠から出産に至る不安を描いたサイコスリラー小説で、映画化もされた『ローズマリーの赤ちゃん』（*Rosemary's Baby*, 1967）の著者として知られるレヴィンが、その後1972年に発表したのが『ステップフォードの妻たち』である。舞台は1970年前後の、ニュー・イングランド郊外の高級住宅地ステップフォードである。物語は、当地に移り住んだ30代の主婦ジョアンナ・エバハート（Joanna Eberhart）が、政治やウーマン・リブ運動の同志を見つけようとするにもかかわらず、女らしい身なりを整え、家事にいそしむばかりで、女性同士の交流には目もくれない他の妻たちの不自然さに気づくことから、幕を開ける。彼女の目には妻たちはあたかも「ロボット」［Levin 1972:97, 157］[9]のような、薄気味悪い存在に映る。それどころか、ジョアンナと交友を結んだ数少ない仲間たちさえ、一人、また一人と、ステップフォード風の妻へと変貌を遂げていくのである。同様の変化が自身を襲うのも時間の問題と、彼女自身次第に追い詰められた精神状態に陥ってゆく。ステップフォードはかつて『新しい女性の創造』（*The Feminine Mystique*）を著したベティ・フリーダン（Betty Friedan）が講演を行い、女性団体も組織されていた土地柄である。しかしその後、夫たちによる「男性協会」が勢力を増すのと相前後して、女性団体は解散に向かった経緯があり、妻たちのロボット化も、多くの男性科学者を擁するこの協会による陰謀ではないか、というのがジョアンナの推測である。しかし真実を突き止めようとする彼女の思いもむなしく、結局はジョアンナも典型的なステップフォードの妻と化し、女性たちのロボット化をめぐる真実については明らかにされないまま、物語は幕を閉じるのである。

男性協会による女性のロボット化の画策という、ジョアンナの推測が果たして正しかったのかについて

は、その可能性を読者に十分に印象づけながらも、厳密には彼女の推測の範囲内に置いている。それをあくまで転居という環境の変化への不適応に起因する、不安・妄想の域に留め置く可能性を残すため、作中には客観的な視点を代表するものとして、精神科医の診断などが挿入されてもいる。真実を宙吊りにするこの手法は、『ローズマリーの赤ちゃん』にも共通するものである。またこの作品では、妻たちに美容外科手術が施されたと明言されているわけでもない。しかし彼女たちの多くは作中でその容姿を描写されないことはなく、皆一様に男性の理想にかなった美しさをもつと設定されている。ジョアンナが彼らを、「コマーシャルの中の女と同じ…ただ美しいだけ…現実感が出ず、説得力がない」[Levin　1972:65]と評するのも、そこに何らかの画一性や人工性、またメディアにより生産される情報にも似た、虚構性を感じとってのことである。彼女はさらに妻たちがテレビに登場する女優以上に、自動で動く人形にいっそう近いという感想も抱くが、これは男性協会の会長がかつて人間そっくりに話すことのできる人形の開発・製作に携わった経歴をもつこととも符合を見せる。ジョアンナ自身、作品の結末では、「ルサーンヌ（知人）が覚えていた彼女より美しく」なった[Levin　1972:183]とされるのである。

つまりここに美容外科への直接的な言及は見当たらないにせよ、妻たちの似姿としての「人形」、或いはその現代版である「ロボット」上に社会の理想とする女性美を具現した男性協会は、美容外科における男性医師を表し、またその身体上に一方的に加工を施された妻たちは、美容外科患者を表すものと一般に理解され、そうした文脈でこそ本論冒頭のような議論が巻き起こったわけである。そのように考えれば、妻たちのロボット化の可能性も主人公の推測の範囲に留まるものではなく、むしろ彼女こそが規範というものの非本質的な性質を見抜いていたのだということにもなる。つまり女性たちが従うべき女らしさの規範は、あたかも自然であるかのように糊塗されながら、その人工的、画一的で暴力的でもある性質は、「ロボット（化）」というメタファーでこそ最も的確に表され得るようなものであったということである。しかしそうした規範の存在に十分に意識的で、それに順応する妻たちとの同一化に抵抗を試みながら、しかし結局は同じ穴の狢にならざるを得なかった主人公の姿を描いて幕を閉じるこの作品は、一体何を意味しているのだろうか。

ロボット化を迫る男性協会が主人公を追い詰めていくというこの作品のプロットは、女性とその身体の抑圧の原因を、性を基盤とした社会の権力構造、言い換えれば家父長制社会に求めるという、前項では第一番目に挙げた見方を反映している。主人公を含む女性たちを社会の規範に沿うロボットに作り変えたことを示唆する原作のエンディングは、3年後に製作された映画（以下、「1975年版」）ではその可能性をいっそう誇張する形で踏襲され、いずれも社会の構成員としてその外側に立つことが不可能である個々人には、規範への抵抗の契機が与えられないという理解を示す点で共通している。モーガンとデイヴィスの議論で前提とされているのも、規範に盲従する、この妻たちのイメージである。モーガンが、かつて自身が参加した集会で目にした「整形依存」と呼ばれる女性たちをステップフォードの住人になぞらえたのも、彼女たちが都市郊外に住む、経済的にも富裕な中年層であったことに加え、その容姿に現れていたであろう画一性や人工性に社会の要請に従順であろうとする姿勢を見てとったためと思われる。一方、美容外科の患者が作品の妻たちのイメージで捉えられるのを嫌ったデイヴィスは、患者たちを社会から要請されるジェンダー規範を再生産する受動的な立場に追いやることなく、あくまでも認識をもって手術を選択した行為体（エイジェンシー）と位置づけようとする立場から、「彼らは単に夫たちの欲望に順応する、静かなロボットなどではない。…ステップフォードの妻たちとは全く異なる」[Davis　1995:176]と反論したのである[10)]。

原作、及び1975年版の映画に描かれた妻たちは、その身体を家父長社会に一方的に搾取される対象として、上のような議論を引き起こしたわけだが、約30年の月日を経て製作された映画では、その描かれ方に変化が生じている。ニコール・キッドマン（Nicole Kidman）主演で、アメリカでは2004年、日本では翌年に公開されたこの映画（以下、「2004年版」）は、時代設定を1970年前後から21世紀と見られる時代に移すなど、原作の一部を翻案して用いている。原作と1975年版の映画で、写真家を目指す主婦であった主人公のジョアンナは、2004年版ではメディア界で成功を手にした敏腕のテレビプロデューサーとなり、視聴者からの訴訟トラブルを回避するために引責辞任に追い込まれ、職場の部下であった夫とともにコネティカット州ステップフォードに移り住むとされる。しかし彼ら

が新たな地で目にしたのは、あたかも1960年代の社会を再現したかのような時代がかったコミュニティや、当時の理想を反映した家庭の主婦たちであった。ここに現代の社会状況と、相変わらず女性に求められている旧弊な規範との乖離が、奇妙なコントラストをなして浮かび上がる仕掛けである。また前作から現在に至るまでの科学技術の発達を考慮し、1975年版の映画で採用されていた、マネキン人形にテープレコーダーを搭載したような人造人間、つまりロボットとしての妻たちのイメージは、2004年版では脳にナノチップを埋めこんだ、サイボーグと思われるイメージに取って代わられている。

ステップフォードで繰り広げられるエピソードについては、2004年版の映画でもおおよそ原作をなぞった形で進行するが、主人公が男性協会によるサイボーグ化の危機に瀕する結末には大幅に手が加えられている。彼女は一見ステップフォード風の妻に改造されたかのような女性らしさを装って見せながら、その実妻のサイボーグ化を断念した夫と力を合わせ、女性たちに組み込まれているコンピューター・プログラムを解除し、男性協会会長への反撃に及ぶのである。そこで明らかになるのは、当の会長自身も実はサイボーグであり、妻たちを始め夫のサイボーグ化まで画策していたのは、会長の妻ウェリントン夫人であったという事実である。そもそも遺伝子工学と脳外科の権威であった彼女は、「ロマンスと美の世界」から成る「理想郷」を夢み、女性のみならず理想的な男性性を備えた男（夫）さえ、人工的に創り上げていたのだ。ジョアンナの攻撃を受け、夫が再生不能な身体になると、彼女も愛に殉じるかのように自身の命を絶つ。

原作にはないこのような結末を付け加えることにより、2004年版の映画は、女性の身体と社会的規範との関係についての新たな視点を提示している。まず妻たちのサイボーグ化を首謀したのが、男性協会会長ではなくその妻であったとすることで、女性性やそれを要請する異性愛等の規範は、支配者集団から一方的に強制される性質のものではなく、むしろ被支配者自身に内面化されて成立するものであることが示唆される。自身を抑圧する夫という存在さえ夫人が創り出していたという矛盾も、彼女、ひいては女性たちがいかに既成のジェンダー秩序に忠実であろうとするかを立証するエピソードとなる。前項に挙げた、フーコーの権力概念に基礎を置いた見方に従えば、ここに女性たちは自身を抑圧する社会の規範にも自ら順応しようとする、いわば共謀関係にある者となる。こうした設定は、女性の抑圧的状況の原因を、自らを犠牲化するその自己矛盾的な態度に帰すことにもなりかねない。しかしその一方で、見せかけの女性性により男性協会の術中に陥ったかのように装い、反撃の機会を狙った主人公には、規範に従順であるばかりでなく、むしろそれとの交渉の機会をうかがう意図を見てとることができよう。美容外科患者の決断に能動性を見出そうとしたデイヴィスが依拠した概念に、ドロシー・E・スミス（Dorothy E. Smith）の「秘密の行為体」やアイリス・マリオン・ヤング（Iris Marion Young）の「女性性を行う」があるが、これらは異性愛的存在という主体にふさわしい外見を作り出すことに積極的な主体の背後に、秘密の主体が存在するという二層の主体を想定するもので、ジョアンナの行為とも重なる。ここには男性協会によるロボット化から束の間の逃亡を試みることが唯一可能な抵抗の表現であった、原作や1975年版の映画とは異なる、より能動的な反逆の姿勢が明らかである。デイヴィスの主張する美容外科の患者像は、むしろこの2004年版の映画（モーガンとの論争の時点ではまだ発表されていなかったが）に描かれた女性たちの方に近いと言えるだろう。

また男性協会会長自身が妻に創り上げられたサイボーグであったとする、2004年版の映画には、男性性の構築的側面を暴露する試みを見出すこともできる[11]。事実を知った主人公が、彼も所詮は「ステップフォード・ハズバンド」に過ぎなかったのだとつぶやく時、社会の規範への順応を要請されるのは、男性についても女性の場合と何ら変わりないことが確認される。第二派フェミニズムにおいて、ジェンダーの構築性が議論の対象となる中で、女性性の理想がしばしば現実と著しく乖離したものであることが指摘される一方、男性性に関してはそれが改めて問われるまでもない、普遍の側に位置するかのようにみなされ、問題化が遅れた感もある。しかし2004年版の映画では、女性性に対する問題意識を男性性にも適用することにより、それぞれの内容を問い直し、意味づけ直す契機とする意図が見られる。

男性性の構築性の認識は、男性性の多様性についてのそれを導く。2004年版の映画では妻たちのサイボーグ化の企みは、ビジネスや法曹等、社会のあらゆる分野の第一線で活躍する「スーパー・ウーマン」を

妻とした夫たちが、男性性の危機に襲われたことに端を発するとされている。ここに描かれるのは、ある社会や時代に理想とされる男性性のモデルに合致せず、むしろそれが抑圧的に作用する男性の存在である。主人公の夫も、テレビ局在職中は妻の部下として仕え、ステップフォードでも妻のサイボーグ化に踏み切ることができずに、男性協会からは裏切り者と糾弾される。妻からはそれこそが「本物の男」と讃えられ、彼に倣うべくステップフォードの他の夫たちも再教育を施されて、多様な男性性のあり方が検討されることになる。無論ここに主張されるのは、これまで女性性とみなされていた属性を男性にあてがうことで、社会におけるジェンダー関係を単純に逆転することではない。そのような変革はむしろ、ジェンダー差異の重要性の再強調にもつながる危険をはらむものであり、むしろ中心という概念をもたない、部分的な複数のアイデンティティや流動的な主体こそが、二項対立に新たに取って代わられるべきなのである［ブライソン　2004:270］[12)]。

2004年版の映画における二項対立的なジェンダー・アイデンティティへの問いは、原作にはない一組のゲイ・カップルの登場によっても強調される。ステップフォードは寛容な土地柄であると謳い、彼らをコミュニティの一員として受け入れた男性協会の当初の思惑は、カップルのうちの1人を男らしさの規範に沿って改造することにあった。彼は主人公を始めとする当地の妻たちと友好を結ぶ一方で、男性協会にも出入りするなど、ジェンダーの境界を自由に横断する存在であったためである。しかし彼は、協会によるサイボーグ化の後も同性愛関係を維持することにより、二元的ジェンダー・カテゴリーに基づいた異性愛の規範を攪乱する存在であり続ける。1975年版の映画は、男女を対立構造として描き過ぎているきらいがあるとして批判も受けたが［Silver　2002:110］、2004年版では、このゲイ男性の曖昧な位置によりジェンダーの境界が問い直されていると言えるだろう。

境界の曖昧化という点で言うなら、そもそもサイボーグという存在自体、生体と機械（テクノロジー）、自己と他者間の境界を侵犯するイメジャリーである[13)]。有機体と機械から成る、異種混交としてのサイボーグを概念化したダナ・ハラウェイ（Donna Haraway）が、「ジェンダーとは歴史的な広がりと深さをたたえているにせよ、結局グローバルなアイデンティティではないのかもしれない」［Haraway　1991:180］と言うように、2004年版の映画におけるサイボーグのイメジャリーの採用は、従来自明視されていた、男女を始めとする二項対立的な諸カテゴリーの自律性を揺るがし、越境や他との部分的なつながりによる提携の可能性を模索したものと言える。逆に言えば、ロマンスに満ちた理想郷としてのステップフォードの建設を夢見ながら世を去ったウェリントン夫人は、ジェンダー・カテゴリーの自明性が問われるまでもなかった、過去へのノスタルジーを体現する存在であったと理解されよう。サイボーグのイメジャリーには、それが理想化された女らしさを目指す美容外科等の形を取る可能性がある点で懸念も示されながら［アンダマール　2000:61］、ここではむしろその境界侵犯的な性質が肯定的に取り入れられている。

レヴィンの原作は、物語の舞台となった1960年代から70年代にかけての、アメリカ社会における女性の置かれた状況を示す背景として、原題をそのまま日本語に置き換えれば「女らしさの神話」ともなる、フリーダンの『新しい女の創造』に言及している。これは女性が規範としてそうべき様々な社会的要請と、それが彼らの人生にもたらす決定的な制約を明らかにした著作である。しかしかつて女性たちが拒絶したこの神話よりも、はるかに「陰険かつ狡猾」な性質をもつ［Wolf 1991:19］のが「美の神話」なのであり、そこから抜け出す有効な方策さえ見出されないまま女性の心身が蝕まれていることは、ウルフによる同名の著作にも指摘されている通りである。1972年に発表されたレヴィンの原作は、フリーダンの著書が原動力となって第二派フェミニズムが大いに盛り上がりを見せた後の巻き返し（バックラッシュ）や、「女らしさの神話」に代わる新たな神話の登場を予告するものでもあっただろう。そしてその神話を、ロボットという新たなメタファーを用いることで、きわめて現代的なピグマリオン・ファンタジーとして再生させた作品であったと考えられる。しかしその後原作が映画化される過程では、このロボットのイメジャリーは新たにサイボーグに姿を変え、神話を再生産するだけでない女性の能動的なあり方や、さらに女性というカテゴリーさえ越えた、政治的提携と共闘の可能性が模索されるようになった。ここに小説の発表から30年余りの間の、女性の身体をめぐる様々な議論や理論的な成熟が反映されていることは明らかである。

＊

本論では美の問題や、美容外科手術をはじめとする

様々な美容実践を、現代社会における非対称なジェンダー関係に根ざしたきわめて政治的な問題として捉え、それが論じられる際の理論枠組みを概観したうえで、その変遷が一遍のアメリカ小説、及び映画にも反映されていることを見てきた。かつて「典型的にアメリカ的な現象」[Davis　1995:5]と言われた美容外科の隆盛も、その後「グローバル化」[Gilman　1999:8]の様相を見せ、それが日本についても例外ではないことは、メディア等を通じた手術の一般化の傾向にも見られる通りである。様々な社会的な要請が交錯した形で現れる身体をめぐる、きわめて現代的な一例として、美容外科は今後もいっそう考察・議論を深めることが求められる領域と言えるだろう。

〈注〉

1) 近年では、ローラ・ブッシュ(Laura Bush)現アメリカ大統領夫人を評する際、この語が使用された例がある[Arora　2004]。
2) 実際には20世紀以前にも美容外科の概念は存在し、少数ながら再建手術と並行して行われてもいた。また再建手術、美容外科手術を指す名称についても、時代により混乱が見られ、両者の概念そのものに重複的な側面があったことがうかがえる[Gilman　1999: 8-16]。
3) アメリカ以外の国々も同様の傾向にあるとして、デイヴィスはヨーロッパにおける美容外科手術数の伸びを紹介している[Davis 1995:20-21]。
4) 比較的新しい施術の例として、フェイス・リフトや豊胸、脂肪吸引等の手術が挙げられる[Davis　1995: 22-27]。
5) ハイケンは、「顔のほくろやあざ、目尻のしわ」さえ「異常、欠陥」と診断される例を引き、このようなケースがむしろ一般的であったとしている[Haiken 1997:122]。またこうした逸脱領域の意図的な拡大は、「脅しのメカニズム」と呼ばれる商業主義的な装置として美容外科産業の成長を牽引してきたことが、ウルフに指摘されている[Wolf　1991:232, 251]。
6) 近年美容外科においては、男性患者の増加傾向も指摘されているが[Haiken　1997:160]、その場合には職業上の必要性が強調されることが専らで、女性ほど強制的な側面はないという見方もある[Friday 1996:437-8]。本文中に引用した美容外科患者の男女比のデータにおいても、男性の割合が勝っているのは、頭髪の移植のみである[Gilman　1999:35]。またアン・バールサーモ(Anne Balsamo)は、美容外科の患者として女性が想定されている事実を、医学書における図版のモデルの性別の極端な偏りに読みとっている[Balsamo　1996:59-60]。美容外科手術の動機づけに関するジェンダーの差については、ギルマンの他に、Balsamo 1996:67-71、Lakoff and Scherr 1984:345に論じられている。
7) これは『生体の彫像』(*Sculpture in the Living*, 1934)、『ドクター・ピグマリオン』(*Doctor Pygmalion: The Autobiography of a Plastic Surgeon*, 1953)といった、男性美容外科医による著作のタイトルにも見てとることができる。
8) 男性を美容外科手術の対象として描いた少数の作品に関しては、例えば犯罪事件との関わりから逃れる目的など動機を他に設定することで、男性を美の追求から遠ざける周到な配慮がなされている。
9) 以下の本書からの引用は翻訳書の訳文を用いる。
10) こうしたデイヴィスの美容外科患者の扱いは、他の文学作品においても、積極的な主人公＝患者擁護の解釈を打ち出していく[Davis 1995:64-67]。これについては[英　2006]に論じた。
11) 『ステップフォードの妻たち』は、本論で取り上げた二度の映画化の他にも、1980年から90年代にかけてアメリカで3度テレビドラマ化されており、理想的な男性性の規範の構築については、既にそこで扱われている[Kang; http//en.wikipedia.org/wiki/Stepford]。
12) ジェンダー・アイデンティティが自己意識や社会に深く根づいたものであり、その組み換えは複雑・困難を極める作業となることも、ブライソンに指摘されている[ブライソン　2004:278]。
13) 妻たちのコンピューターによる操作は最終的に解除されるが、その脳には依然としてナノチップが埋めこまれていることから、彼らは今後もサイボーグとして生き続けることになる。本論では妻たちの有機体としての身体に、テクノロジーとしてのチップが用いられているものと解釈しているが、厳密を期すとすれば、彼らの身体自体が既に無機物(ロボット)であり、そこにさらにチップが埋めこまれている可能性も、完全には否定できない。その場合には、女性ロボットの転覆的潜在力を扱ったKangの論考が参考になるだろう。

〈参考文献〉

Arora, Zoya 2004 “Laura Bush is no match for Teresa Heinz Kerry” *Iowa State Daily*, 10 August

Balsamo, Anne 1996 *Technologies of the Gendered Body: Reading Cyborg Women*, Duke University Press

Davis, Kathy, ed. 1995 *Reshaping the Female Body: The Dilemma of Cosmetic Surgery*, Routledge

――――. 1997 *Embodied Practices: Feminist Perspectives on the Body*, Sage Publications

Diamond, Irene, and Lee Quinby, eds. 1988 *Feminism and Foucault: Reflections on Resistance*, Northeastern University Press

Freedman, Rita 1986 *Beauty Bound*, Lexington Books（常田景子訳 1994『美しさという神話』新宿書房）

Friday, Nancy 1996 *The Power of Beauty*, Hutchinson

Friedan, Betty 1963 *Feminine Mystique*（三浦冨美子訳 2004『新しい女性の創造』 大和書房）

Gilman, Sander L. 1999 *Making the Body Beautiful: A Cultural History of Aesthetic Surgery*, Princeton University Press

Haiken, Elizabeth 1997 *Venus Envy: A History of Cosmetic Surgery*, The John Hopkins University Press 1997（野中邦子訳 1999『プラスチック・ビューティー――美容整形の文化史』 平凡社）

英美由紀　2006「現代の『フェミナ・パーフェクタ』――フェイ・ウェルドン『魔女と呼ばれて』」『ジェンダー研究』第9号:59-70　お茶の水女子大学ジェンダー研究センター

Haraway, Donna 1991 *Simians, Cyborgs, and Women: The Reinvention of Nature*, Routledge（高橋さきの訳 2000『猿と女とサイボーグ――自然の再発明』 青土社）

Jaggar, Alison M. and Susan Bordo eds. 1989 *Gender / Body / Knowledge: Feminist Reconstructions of Being and Knowing*, Rutgers University Press

Lakoff, Robin Tolmach, and Raquel L. Scherr 1984 *Face Value: The Politics of Beauty*, Routledge and Kegan Paul（南博訳 1988『フェイス・ヴァリュー――美の政治学』ポーラ文化研究所）

Levin, Ira 2004 orig. 1972 *The Stepford Wives*, Harper Torch（平尾圭吾訳『ステップフォードの妻たち』 早川文庫）

――― 2001 orig. 1967 *Rosemary's Baby*, W. Norton（高橋泰邦訳　1972『ローズマリーの赤ちゃん』 早川書房）

Morgan, Kathryn Paulty 2003 “Women and the Knife: Cosmetic Surgery and the Colonization of Women's Bodies”, *The Politics of Women's Bodies: Sexuality, Appearance, and Behavior*, 2nd ed. Oxford University Press

Ramazanoglu, Caroline, ed. 1993 *Up Against Foucault: Exploration of Some Tensions Between Foucault and Feminism*, Routledge

Riessman, Katherine Kohler 2003 “Women and Medicalization: A New Perspective”, *The Politics of Women's Bodies: Sexuality, Appearance, and Behavior* 2nd ed. Oxford University Press

Showalter, Elaine 1987 *The Female Malady: Women, Madness, and English Culture*, *1830-1980*, Virago Press（山田晴子、薗田美和子訳　1990 『心を病む女達――狂気と英国文化』 朝日出版社）

Silver, Anna Krugovoy “The Cyborg Mystique: The Stepford Wives and Second Wave Feminism”, *Arizona Quarterly: A Journal of American Literature, Culture, and Theory*, Vol. 58, Number 1（2002）: 109-126

Smith, Dorothy 1990 *Texts, Facts, and Femininity: Exploring the Relation of Ruling*, Routledge 1990

ソニア・アンダマール、他　2000 『現代フェミニズム思想辞典』 明石書店

Weitz, Rose, ed. 2003 The Politics of Women's Bodies: Sexuality, Appearance, and Behavior 2nd ed., Oxford University Press

Wolf, Naomi 2002 orig. 1991 *The Beauty Myth: How Images of Beauty Are Used Against Women*, Harper Collins（曽田和子訳　1994 『女たちの見えない敵――美の陰謀』 ティビーエスブリタニカ）

山下柚実　1991『美容整形――身体加工のテクノロジー』三一書房

Young, Iris Marion 1990 *Justice and the Politics of Difference*, Princeton University Press

1975 The Stepford Wives Dir. Bryan Forbes. Perf. Katharine Ross. Paramount

2004 The Stepford Wives Dir. Frank Oz. Perf. Nicole Kidman. Dream Work LLC and Paramount Pictures co.

http//en.wikipedia.org/wiki/Stepford 4.2007

ヴァレリー・ブライソン　2004 『争点・フェミニズム』江原由美子他訳　勁草書房

（はなぶさ・みゆき　お茶の水女子大学大学院博士後期課程人間文化研究科比較社会文化学専攻）